
千冬と束は似た者同士

彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千冬と束は似た者同士

【Nコード】

N0576Z

【作者名】

彩

【あらすじ】

千冬と束がひたすら仲良しな話。そして千冬性格が全く別人な話。とりあえず、親友仲は恋仲にシフト？姉弟、姉妹仲は良好です。そして束はやっぱり天災のままでした。

まえがき

まえがきですが、小説の方向性をまんま書いてます。苦手な方は回れ右推奨です。

この小説は、主に千冬で構成されております。次点で束。

とりあえず作者が千冬と束の百合を書きたかっただけ。ひたすら仲良くじゃれあう二人を書いてみたかった。

ちなみに、千冬のほうの性格捏造が酷い。いろいろ違う方向に向いています。それでもいい方のみ、楽しんで行って下されば。

……あと、作者は戦闘シーンが苦手。ISの機体についても、原作見ながらどうにかこうにかです。機体の性能とかアドバイスももらえたらうれしいです。

批判中傷は、お控えくださると。お手柔らかに、気長にお付き合い下さると幸いです。

似た者同士たちの出会い

「ああ、嫌ね。面倒だわ」

よる、めをさましたら、おかあさんのこえがきこえた。

「今更、そんなこと言っても仕方ないだろ」

リビングでおかあさんと、おとうさんがはなしてた。

「でも私、言ったわ。結婚するときに」

なにをはなしているのかな？わたしはドキドキして、ろっかからおかあさんとおとうさんのはなしを、きいてみた。

「私、子どもは絶対にいらなんて、言ったわ」

わたしは、いらなんてこともなかった。

とある幼稚園の、入園式。一クラス三十人あまりで、計三クラスクラス名はあさがお、たんぽぽ、ひまわりと幼稚園らしい可愛らしいもの。

全体を通しての入園式が終わり、クラスごとの部屋に来て数十秒。イスに座ったままはしゃぐ子、緊張したように周りをキョロキョロと見ている子、立って歩き回ろうとして早くも注意されている子。

少しだけ見慣れてきた毎年毎年の光景と、子どもたちの騒ぎ声に、部屋に入ってきた今年で二年目の若い女の先生が、笑顔で口を開いた。

「はい、みんなー！こんにちわー」

「こんにちわー！！！」

元気に挨拶をすれば、殆どの子どもが元気よく、中には恥ずかしそうに小さな声で、返事をしてくれる。彼女はそれに笑みを深めて、大きな身振りで自分を示して子どもたちを見渡した。

「今日からみんなの先生をする、佐々木加奈です。加奈先生って、みんな呼んでねー」

「かなせんせー！」

「はい！」

上々の反応に、加奈はうんうんと頷く。出だしは好調に見えた。にこやかに笑顔を浮かべたまま、加奈は子どもたちを見回す。笑顔の子、おどおどした子、隣の子に話しかける子、たくさんいた。

「（……………あれ？）」

その中に、加奈は予想しない存在を見つけて、少しばかり驚いて目を瞠る。

見つけたのは、どういうわけかパソコンを持ち込んでいる女の子。周りを一切気にせずにカタカタとキーボードを打ち鳴らす姿は、子どもとは思えないほどに異様に映る。

加奈が特に気になったのはこの子ども。けれどその疑問も、次々に消化しなければ無い恒例行事の為にすぐに思考の外へと追いやられた。

「それじゃ、まずは自己紹介をしましょう。お友達に、自分の名前を元氣よく教えてあげてくださいね」

一番は、相田君。そう彼女の言葉で順調に始められた自己紹介に、
またも彼女が少しばかり目を見開いたのは、あ行が終わる直前の事。

「——織斑千冬です」

席を立ち、名乗り、また座る。僅か三秒の出来事に、加奈は何も
言えずにあぐりと口を開けた。

どの子どもも、もじもじと照れたり、元氣よく名乗ったりと子ども
らしさが見えるのに、たった今名乗った女の子にはそれが無い。
ただの事務作業のように、それを終わらせてしまった。

「……あ、そ、それじゃ次は、川内藍ちゃん」

「ひゃ、ひゃい！」

思わず呆けてしまった彼女は、慌てて次の女の子を促した。今は
順調に自己紹介を終わらせることが第一とされ、一人だけを気に掛
けるわけにはいかないのだ。

そのまま、彼女の思うところの子どもらしい自己紹介が続き、さ
行に差し掛かったところで。順番は、彼女が気にしたパソコンを持
ち込んだ女の子の番となった。

「それじゃ、お名前を言ってくれるかな？」

「……」

「あ、あれ……？」

促しても、女の子は彼女を見ようとしめない。ただ無表情に、一

切の音を遮断しているかのようにパソコンを打ち鳴らしている。

「えっと、お名前、言ってくれるかな？」

再度、困惑しながら聞いて、初めて女の子がパソコンから一瞬、視線を加奈へと向けた。その視線はまたすぐにパソコンに戻されたが、ぼそりと小さな呟きが一つ。

「……………篠ノ之束」

これで良い？とばかりに響いた名前に、加奈は思わず頷いてしまつて、自己紹介は次へと進む。

「（ど、どという事かしら…………？）」

子どもたちの自己紹介を聞きながら、加奈は困惑に頭を悩ませた。自己紹介前半にして、既に問題児候補が二人。それも、やんちゃで困るというのとはまた別の意味で困りそうな、そんな問題児候補。これから彼女は、そんな問題児たちがいるクラスを受け持たなければならぬ。

「（……………がんばれ、私！）」

心中で激励して、こっそりと握った握りこぶしは、じつとりと汗ばんでいた。

入園式のみで終わったその日の翌日。

大きな部屋ではあちこちで遊ぶ子どもたち。鬼ごっこやままごと、

積み木遊びとジャンルは幅広い。

先生である加奈が声をかけるのもあって、人見知りで混ざりたくても混ざれないでいる子どもは、すぐに何かしらのグループに入れられる。そのおかげで、一人で遊んでいる子どもは残すところ二人だけだ。

「千冬ちゃん、皆と遊ばないの？」

「いいです」

千冬は、二人のうちの一人だった。誰とも遊ぼうとせず、ただ眺めているだけ。加奈が声をかけても、淡々と素っ気ない返事をするだけだ。

「（厳しいわね……）」

実は彼女、千冬に声をかける前にもう一人、パソコンを持ち込んだ女の子にも声をかけている。が、女の子には返事さえしてもらえず、その存在を認識すらされずに終わってしまったのだ。

「あつ……」

困惑する加奈を前に、千冬はてくてくとその場を離れる。放っておけないが、扱いに困ってしまって、触れるに触れられない。

「かなせんせー!!」

「あ、はいはい」

他の子どもに呼ばれて、加奈はそちらへ向かう事にした。

一方、加奈から離れた千冬は、折り紙や絵を描く為に用意された机のある一角に座っていた。

椅子に座って、他の絵を描く子どもたちからは十分すぎるくらいに距離を取っている。そうしてただばんやりと、遊び回る子どもたちを眺めていた。

「（うるさい……）」

沸き起こるのは子どもらしからぬ感情のみで、千冬は椅子の背もたれの寄りかかる。

静かな場所で、一人になりたい。それが少女の望みだった。

けれどその望みとは裏腹に、少女の周りは騒がしさに溢れていた。すぐそばを走りまわる子どもたちの足音とはしゃぐ声に、少女は椅子を飛び降りてまた歩き出す。

「（……静かな場所は、どこだ？）」

一人でいると、先生が声をかけてきた。子どもたちの近くにいと、そこはいつそう騒がしかった。

出来るなら一人でいたかった。静かな場所にいたかった。

それが無理でも、せめてこの騒がしい空間で一番静かな場所は、と千冬は壁沿いに部屋を歩いて探し回る。

そうして辿り着いたのは、もといた部屋の角の対角線にあたる部屋の角。そこは他の子どもたちも距離を置き、たった一人の子どもだけが占有する空間。部屋の騒がしさから僅かに離されたそこで、女の子がパソコンをカタカタと打ち鳴らす。

千冬は、この騒がしい部屋でようやく見つけた空間に、静かに静かに息を吐き出した。

「邪魔、する」

一応は、先住者である少女にそう声をかけて、千冬はすっと座

って壁に寄りかかった。それに驚いたように顔をあげたのは、先住者の少女だ。

少女はカタリとパソコンを打つ手を止めて、座り込んだ千冬を眺める。じつと見つめてくる眼差しに、千冬はただ無言で見返して、やがて面倒くさそうな様子で目を閉じた。

「……………ここ、東さんの場所なんだけど」

「そうか」

「邪魔なんだけど」

「少しだけ、いさせてくれ」

「なんで」

「ここは静かなんだ」

あつちが煩いと、千冬は思ったままに告げる。それから、少ししたらすぐに出て行くからとも言って、体育座りで立てた膝に額を押し付けた。

小さく縮こまったその姿は、邪魔だという少女の邪魔にならないようにしているかのようだった。

「……………ねえ」

「……………なんだ」

「名前、なんていうの？」

少女は千冬の名前を覚えていなかった。けれどそれは千冬もまた同じで、千冬は少女の名前を知らなかった。過去形なのは、つい先ほど、少女が自分で名乗ったからだ。東さんと。

「織斑、千冬」

「千冬……………」

縮こまった体から発せられた声はくぐもっていた。少女は千冬の名前を繰り返して呟くと、今までの無表情が嘘のような笑みをパツと浮かべる。

「ちーちゃん」

「……なんだ、それは」

「東さんはちーちゃんと呼ぶことに決めたよ。いいでしょ？ いいよね！」

「……………好きにしろ」

一転して騒がしい少女に、千冬は投げやりに肯定の言葉を返した。そのそと近づいてくる音に顔をあげる。すぐ隣で少女が千冬を見ていた。

「ちーちゃん」

「……………」

「私はねー、篠ノ之東だよ。東さんだよ」

「……………そうか」

「そうなんだよ！」

意味も無く強く頷いて、東は千冬の隣でまたパソコンをカタカタと打ち鳴らし始めた。

二人のいる部屋の角は他の子どもから距離を置かれて、子どもたちの遊ぶ騒がしさからは少し遠い。

入園してから翌日に千冬が見つけたのは、パソコンのカタカタと鳴る音が響く、東という先住者のいる空間だった。

似た者同士たちの出会い（後書き）

転生者が千冬と束と同じ幼稚園で出会う二次創作では、束はともかく、千冬がとても子どもらしいです。

それを見て、思ったこと。千冬が束みたいな性格だったら、どんなんだろうと。

そんな千冬の、変わった話。ぶっちゃけこれが書きたかっただけとか、言えない。

問題児は問題児

翌日、空は晴れ渡る青空だった。

当然のように外で遊ぶことになって、千冬は照りつける太陽から逃げる様に日陰に入って座っていた。

遠目に砂場で遊ぶ子どもたちや、時折視界を走り去る鬼ごっこをする子どもたち。

千冬のいる日陰はそんな彼らから遠く、先生の目の届くギリギリの範囲だったため、子どもたちの騒ぎ声は遠かった。

「ちーちゃん、嬉しい？」

「……ああ」

静かで嬉しいか、と聞いた束に頷いて、千冬はぼんやりと木の葉を眺める。当然のように束がいるけれど、気にはならなかった。

「見て見て、ちーちゃん！」

軽く目を閉じた千冬に、束は身を寄せてパソコンを差し出す。横に細長いノートパソコンの画面に表示されている数式と何かの設計図に、千冬は首を傾げた。

「これは？」

「束さん特製の最新パソコンだよ！空中投影型ディスプレイ&キーボードでいつでもどこでも大画面で大容量だよ！すごいでしょ！」

「へえ」

「………信じてない？」

「いや」

軽い返事に不安そうに瞳を揺らした束に、千冬は首を振る。そうしてじっとパソコンの画面を眺めて、もう一度首を傾げて答えた。

「理解は出来ないが、凄いのはその説明で分かった」

「本当!？」

「ああ。束は頭が良いんだな」

「——うんっ!!」

千冬のその肯定は、束にとって初めての肯定だった。

子どもの身でありながら、大人ですら完成させることのできない理論を完成させる束を認める大人は、束の周りにいなかった。両親ですら、束を腫物のように扱う。

同じ子どもでも、束の傍には誰も寄らない。無表情でただパソコンを打ち続ける少女は、幼い彼らにとって理解できない不気味な存在だった。

「えへへっ、ちーちゃん!」

「……?」

そんな束に近づいてきたのは、千冬だった。

昨日一日、束は千冬と一緒にいた。千冬は何にも興味が無いようだった。子どもたちが遊び回るのを、煩そうに見たりはしていなかった。

それは、まるで束と同じように思えた。束は興味が無いものに一切の関心を抱かない。それは物だけではなく人間にも同様である。

ただ無関心に世界を見る束にとって、千冬は初めて興味を抱けた人間だった。いや、もしかすれば既に、それだけでは無くなっているのかもしれないけれど。

「千冬ちゃん、束ちゃん」

「……」

「……」

抱き着いてくる束を、千冬が首を傾げながら受け止めていると、先生が声をかけてきた。

途端に表情を消す束。千冬もまたチラリと視線を向けて、けれどすぐに視線は先生を越えて空へと向く。ぼんやりと眺めた空は、雲一つ無い青空。

「みんなと遊ばないの？」

「いいです」

「……そんなこと言わないで、遊びましょ？」

「………いいです」

「あ、ちーちゃん待ってー！」

何度も誘いをかける先生に、千冬は一言告げると立ち上がり、日陰から出て行く。それを追って束もまた日陰を飛び出し、千冬の隣を並んで歩いた。

「ちーちゃんちーちゃん」

「……なんだ？」

「束さんを置いて行かないでほしいんだよ。泣いちゃうよ？」

「………そうか」

「ああっ、待って待って!!」

束がふざけて泣き真似をしてみせると、千冬はまったく気にした風も無く歩いて行ってしまふ。それを慌てて追いかける。

そうして辿り着いた次の日陰は、少しばかり騒ぎに近い場所だった。

「ちーちゃん、ご機嫌斜め？」
「いや」

千冬は、煩くは感じてても不機嫌になつてはいなかった。昨日の騒がしさに比べれば、まだずっとましである。

二人はそのまま日陰の中で、束が千冬に寄りかかるようにしながら、座っていた。パソコンを打ち鳴らすカタカタという音が、千冬の耳を刺激する。その音を聞きながら、少女は目を閉じていた。

「……………」

自分の周りに溢れる子どもたちに、千冬は困り果てていた。切欠は偶然。日陰でぼんやりとしていた千冬たちの元に、ボールが転がってきたことだった。

ボールで遊んでいたのは、二人から随分と離れた場所にいた子どもたちで、千冬は仕方なしにボールを持って子どもたちに渡しに日陰を出た。投げ返すには遠すぎたからだ。

束は行かなくてもいいと言ったが、目の前にボールが転がったままなのも千冬にとっては鬱陶しくて、それゆえの行動だったのだが問題は、その帰り道。先ほど撃沈した先生が、砂場を通りかかった千冬と一緒に遊ぼうと誘ったことだった。

子どもの一人が先生の真似をして、千冬を遊びに誘った。そうしてそれが広がり、砂場の子どもたちから揃って遊ぼうと誘われ、囲まれた。

「……………煩い」

せつかく騒ぎの外にいたのに、気づけばその中心に連れてこられて、千冬は不機嫌だった。表情には一切の変化を見せないが、その実、早くこの場から立ち去りたい気持ちでいっぱいだ。

「お城作ろう！」

「作るー!!」

そんな千冬的心情など知ったことじゃない子どもたちは、えっさえつさと砂を盛り上げお城を作ろうと奮闘する。しかし、全員が全員、好きなように作ろうとするものだから、出来上がるのはぐしゃぐしゃの砂の山。

できなーいとたくさんの方が上がって、騒がしさが増す。それに耐えかねて、千冬は砂に手を伸ばした。

「みんなでいつしよに作ればいいよ。さいしよは、おしろのかべを作ろう」

「うん！」

「ぼくもつくるー!!」

千冬の実似をして、子どもたちがお城づくりを再開する。ところどころで千冬が指示を出して、皆で同じものを作り上げた。

結果として、小さいながら先ほどの砂の山とは泥雲の差のお城が出来上がった。

「できたー!!」

「ちふゆちゃん、すごい」

「……………」

尊敬のまなざしで千冬を見る子どもたちに、本人はといえばもう良いだろうかと考えていた。

遊んだのだから、もう良いだろうか。もう離れても良いだろうか。楽しそうな子どもたちを前に、千冬は小さな笑みを浮かべて見せると、緩慢な動きで立ち上がり歩き出した。

「あっ」

「ちふゆちゃん、どこに行くの？」

さながらハーメルンの笛吹が如く、歩き出した千冬の後ろをぞろぞろと着いて歩く子どもたち。砂場をいったん離れて、他の子どもたちの様子を見ていた先生は、それを見てあんぐりと口を開けてしまった。

昨日一日、束以外の子どもと話す姿を見なかった少女が、子どもたちを引き連れている。それに驚いたのだ。

引き連れている本人は、全くの無表情で楽しそうには見えなかったけれど。

「千冬ちゃん」

「せんせい、なんですか？」

「皆、千冬ちゃんともっと遊びたいんだって。一緒に遊びましょ？」
「……………」

千冬が振り返ると、そこには目をキラキラさせた子どもたちがたくさんいて、加奈の言葉が嘘ではないと肯定しているようだった。

「……………つかれ、ました」

「え、もう……………」

言った千冬が、疲れるほど遊んでいたようには見えなくて、加奈は思わず聞き返してしまった。それに返ってきたのは無言の頷きで、うーんと頭を悩ませる。

子どもたちは、千冬の事情などまるで気にした風も無く、立ち止まったその周りを囲んで遊ぼうと誘いをかけてきた。

「（……煩い、な）」

騒がしいのは嫌いだった。千冬は加奈を見上げるが、彼女は困ったように笑うだけ。

助けは期待できない状況に、千冬は子どもたちを見て一つ提案をした。

「かくれんぼをしよう」

「かくれんぼ？」

「やるーやるー！」

否は無く、その提案に全員が乗ってくる。千冬は加奈を見て、小さく首を傾げて聞いた。

「せんせい、おにやってくれませんか？」

「あ、私？ええ、いいわよー」

「じゃあ、ひやくかぞえて。みんな、かくれて」

「わー！！」

千冬が言つと、一斉に子どもたちは散り散りに走っていく。加奈はその無邪気な様子に笑みを浮かべて、それからふと、千冬がその場に立ったままなのに気づいて首を傾げた。

「千冬ちゃんも、早く隠れないと」

「私は、いいです」

「え？」

「私は、遊ばないです」

呆氣にとられて固まってしまった加奈に、千冬はくりと背を向けて歩き出す。向かったのは束が座る日陰で、加奈が見送る先で少女はそこに座り込んだ。

「……困った、わねえ」

人気者になったけれど、少女にその気は無いらしい。
視界の中で、束が千冬に抱き着いていた。

「ちーちゃん、おかえり！！」

「……ただいま？」

首を傾げて言った。束はギュウツと千冬を抱きしめて、体全体で喜びを表現するかのようにしながら笑っている。

「ちーちゃんがなくて束さんは寂しかったんだよ」

「……束もくればよかったんじゃないか？」

「え、嫌だよ。束さんにはちーちゃんだけがいれば、それでいいの！」

「そうか……」

自慢げに言う束に、千冬はただ小さく返しただけで、視線は晴れ渡る空へと向けられた。首に回った腕に軽く手を添えて、軽く目を閉じる。ここは、束の声は聞こえるけれど、他の音は遠くて静かだ。

「束の傍が、一番落ち着くな」

「えっ、本当？本当ちーちゃん！？」

「……静かで、いい」

「つつれしいな、束さんもちーちゃんの傍が一番いいよ!!」

ギユウウと抱きしめられる腕に力が籠められる。少しかり苦し
くなつて、ポンポンと軽く腕を叩いて知らせると、慌てたように束
が力を緩めた。

静かなこの空間で、千冬はのんびりと目を閉じて微睡んでいた。

問題児は問題児（後書き）

初投稿なので、二話連続で。あとはのんびり更新です。
ちなみにこの作品、束の千冬へのデレ度は常にMAXです。

正反対の少女たち

日曜日、千冬は自分の部屋でぼんやりとしていた。

朝食は食べ終えた。両親はリビングにいたが、千冬は食べ終えて
そうそうに部屋に戻って来ていた。

「……………」

静かで、自分一人の部屋が、千冬の好きな場所。誰の存在も、声
も、視線も、何も気にしなくて良い場所。千冬はここが好きだった。
千冬の両親は、そんな千冬に何も言わない。ある日、何の前触れ
も無く部屋に籠る事の増えた我が子に、何も言わない。千冬は、こ
れが本来の姿だったのだと受け入れた。

「……………」

置物のようにぼんやりと、ただそこにいる。それだけ。

「——ちゃん！」

「……………ん？」

「ちーちゃん！ちーちゃんちーちゃんちーちゃん！！！」

「……………束？」

立ち上がり、からりと窓を開けて身を乗り出す様に外を見ると、
束がいた。二階の窓から顔を出した千冬に、束が満面の笑みで大き
く手を振り飛び跳ねる。

「おっはよー。ちーちゃん！」

「おはよう……何をしているんだ？」

「遊びに来たんだよ！！」

「……ちよつと待ってろ」

トンツと窓を開けるために乗っていた机から下りて、パタパタと玄関へ向かって扉を開ける。部屋を出る直前に見た目覚まし時計は、八時を指していた。

開けた扉に手をかけたまま、千冬は考える。一度、家の中を見てから束に首を傾げた。

「うち、入るか？」

「いいの！？」

「……たぶん、構わない。どうぞ」

「わーいわーい！」

大喜びの束を家に招き入れて、千冬は扉を閉める。二階への階段を上ろうとしたところで、トイレから出てきた母親と目が合ったけれど、何の言葉も無かった。

自分の部屋へと連れて行き、そうすると束はキラキラと目を輝かせて室内を見回し始める。

「ちーちゃんの部屋！」

「そうだな」

興奮する束に、千冬は何が面白いのかと首を傾げた。

千冬の部屋には、特に目新しい物は無い。何の変哲も無いベッドに机、本棚はあるが、あまり本は置いていない。プラスチックのタンスも普段から着るような服があるだけで、玩具と呼べるような物は何も無かった。

「ちーちゃんの匂いがするよ」
「あまり嗅ぐな」

ボスツとベッドにダイブした束が枕に顔を埋めて言ったのに、ベッドに腰掛けて返す。

遊べるような物も無い部屋で、一応はどう歓迎するべきかと千冬は頭を悩ませたが、答えは出なかった。

「束」

「な〜に？ちーちゃん」

「したいことはあるか？」

「したいこと？」

問われて、束ははたと首を傾げる。したいこと、したいことと呟いて、パツと笑った。

「特に無いね！」

「……なら、何をしに来たんだ？」

「ちーちゃんに会いに」

「……………会いに？」

「うん」

最近は楽しみになってきた幼稚園が、今日は休みだったから。楽しみの理由である千冬に会えないとなって、束はそれならと会いに来たんだという。

たったそれだけ。ただそれだけ。自分に会いに来たという束に、千冬は心底不思議そうに聞いた。

「なぜ私に会いたがる？」

「束さんはちーちゃんにフォーリンラブ！」

「ふぉー、りん……？」

「ちーちゃん愛してるー！！」

「……………愛？」

ますます分からない、と目をパチパチと瞬かせた千冬に、東は笑う。

「ちーちゃんは、東さんと一緒にいればそれでいいんだよ」

「一緒に、か？」

「そうだよ。それでいいんだよ」

「……………わかった」

今度は単純な答えに、千冬はあつさりと頷いた。東の笑みが深まる。

腰かけていた体勢からベッドに倒れ込んだ千冬は、同じように横に寝転んだ東に、思ったままに伝えた。

「東の傍は落ち着くから、一緒にいい」

「その返事は最高だよちーちゃん！」

ギュウツと抱きしめられる。柔らかなベッドの上で抱きしめられて、千冬はそのまま目を閉じた。

幼稚園の子どもたちの千冬と東への評価は、正反対なものだった。千冬は、子どもたちの人気者だ。見た目は目つきが鋭く怖い印象を与えるも、一度触れてしまうと、不思議なほどに子どもたちは千冬に懐く。それはもう、先生以上に子どもたちを統率してしまうくらいに。

束は、子どもたちに距離を置かれている。話しかけても見向きもされず、それ以前に常に無表情でただパソコンを弄り続ける束が、子どもたちには異質で恐かった。そう思うのは子どもだけでは無く、大人までもそうだった。誰もが束を扱いかねて、近寄ることが出来ない。

そんな正反対の評価を受ける千冬と束だが、当人たちはとても仲が良い。遊び始めると、子どもたちは挙って千冬を誘おうとするが、千冬本人はその前に既に束の傍にいる。それによって、子どもたちは千冬を誘うことが出来ずにやきもきする羽目になる。二人にとって、それは全く関係の無い事らしいが。

「ちーちゃんどう？これすっごいでしょ！！」

「……よく分からないが、何をするためのものなんだ？」

「空を飛ぶんだよ！着るだけで飛べるんだよ、びゅーんって！！」

「それは、確かに凄いな」

束の見せる設計図は、相も変わらず千冬には理解できない数式や言葉でいっぱいだったが、彼女は嫌な顔一つしない。束の単純明快な説明を聞き、言葉少なに思ったままの感想を言う。その繰り返し。千冬と束は、いつも一緒にいる。幼稚園に來ると束が千冬に突撃し、それから基本はずっと一緒だ。時々、千冬が先生に引っぱられて、他の子どもたちの輪に入れられることもある——その際に束は絶対に一緒に行きはしない。無表情に不機嫌なオーラを出しはするが——けれど千冬は、子どもたちの遊びに一度付き合つと、もう良いだろうとばかりに束の元に戻っていく。そうなると誰かが引き留めようとも、全くの興味を示さなくなる。そうして千冬はまた、束の話を聞きながら時間を過ごすのだ。

「ちーちゃんは、笑わないね」

「……なんだ、突然」

話しの最中、束は何を思ったのか呟くように言った。千冬が首を傾げて見ると、彼女は拗ねたように唇を尖らせて返す。

「あの子たちには、ちーちゃん笑うのに。束さんにはちーちゃん笑ってくれないんだよ」

子どもたちと遊んで、遊び終わると千冬は決まって小さな笑みを浮かべる。そうしてから、束の元に戻る。

けれど束にそうした笑みを千冬が向けた事は無くて、束はそれが不満で仕方が無かった。

むうっと説明した束に、千冬はパチクリと目を瞬かせて聞く。

「……………笑ってほしいのか？」

「笑ってくれるの？」

「別に、それくらいなら」

笑えというなら、笑えると。千冬は、束の願いに答える様に小さな笑みを浮かべて見せた。

じっと見つめてくる束の目を、笑みを浮かべたままで見返す。喜ぶかに思われた束は、とても不思議そうな表情をした。

「ちーちゃん、無理してる？」

「……………どうしてだ？」

「だって、楽しそうじゃないよ。面白そうじゃないよ。笑ってるけど、泣きそうだよ」

「……………」

矢継ぎ早に言われた言葉に、千冬はふっと笑みを消して束を見る。そうすると、束は何処か安心したように千冬と入れ替わりで笑みを

浮かべた。

「ちーちゃんは、そっちの方が楽なんだね」

「……そう見えるのか？」

「見えるよ。束さんにはなんでもお見通しなのさ！」

「……そうか？」

「あれ、なんでそこで首傾げちゃうの？そこは、凄いなって言うところだよ！？」

「……………」

「ちーちゃん、黙っちゃ嫌だよー。何か言ってー！」

「……束は、凄いな」

呟くように言われたそれは、普段とはどこか違う響きを持っていた。

「べつに、楽しくて笑うわけじゃない。ただ、笑った方が楽に離れられるから、笑うだけだ」

「ふうん……束さんは、あの子たちと遊ぶことがよく分からないけどね」

「私も、興味は無い」

なのに連れて行かれてしまうから、困るのだ。千冬は一度として自分から子どもたちの輪に入って行った事は無い。連れて行かれ、置かれ、穏便に輪を離れるためにその場を一度満足させてから、次が始まる前に離れる。

それは千冬が徹底して子どもたちとの間に壁を作っている、何よりの証拠だった。

「わざわざ、関わる気にもならん。騒がしいのは好きじゃない」

「束さんはちーちゃんに関わるの大歓迎！」

「……束の傍は、一番落ち着く」

「おおつ、殺し文句だよー。束さんはそんなちーちゃんの愛に溺れそうだよ！」

「そうなのか？」

「そうなんだよ！！」

全身全霊の肯定を前に、千冬はもう一度、そうなのかと呟いた。よく分らないままに納得したらしかった。

基本的に、千冬は束の言葉を否定しない。というよりも、束だけでは無く誰の言葉も否定しない。

全てを受け入れる。まるで千冬の中には何も無いかのように、何かの器のようにその言葉を受け入れて、受け止める。言葉にすれば簡単だが、実際に出来るかとなるとそれは難しい事だった。

「束さんもちーちゃんの傍が一番だよー」

「そうか」

「……むう、嬉しいとは言ってくれないねちーちゃん
「嬉しい？」

束の言葉に、不思議そうに千冬は聞き返した。

「束さんはちーちゃんに、落ち着くって言われると嬉しいんだよ」

「……？」

「あ、嬉しいじゃなくて愛してるでも良いんだよ！むしろそっちの方が嬉しいんだよ！！」

「………愛してる？」

「ぐはっ」

それは、束の想像を絶する破壊力を持っていた。

歡喜のあまりに血を吐き出してぐたりと倒れた束の体が、ぴくぴ

くと痙攣する。その顔に至高の笑みが浮かんでいるのを確認して、千冬はあまり気にした風も無く床を眺めた。

「……………煩いのは、嫌いだけれど」

唇を指でなぞる。笑おうと思えば、すぐに唇が曲線を描いた。そこには千冬の感情など、関係が無い。

ただ事務的に、必要だから千冬は笑える。笑みを浮かべて見せる事が出来る。そうするのが楽かと言われれば、全く楽じゃないと言えたけれど。

「束」

「んんっ？ なにかなちーちゃん。束さんはちーちゃんの愛に溺れて溺死寸前救援求だよ」

「私は好きじゃない相手の傍に、いたりしない」

「……………」

「笑ってなくても、たぶん私は、束の傍にるのが——楽しいと思う」

「大好き、ちーちゃん!!」

千冬の告白は、いつものように無表情で。それでも束を喜ばせるには十分すぎた。

笑いかけはしなくても、千冬も束も互いを想う気持ちは、同じだった。

正反対の少女たち（後書き）

課題、いかに千冬と束を百合にできるか。

束の秘密基地

興味が無いものに興味を示さないのって、普通でしょ？

「~~~~~」

カタカタとパソコンを打ち鳴らす。三つの画面に三つのキーボードが、今私の目の前にある。

次々と画面に表示させていく数式も、図形も、全部分かる。だって考えのたのは私だから。

「~~~~~」

見かける人間は皆同じ人間に見える。違いなんて無い、皆同じ。

唯一、ギリギリでうちの両親を身内だって判断できるくらい。

誰だって、ただ街ですれ違っただけの人間を覚えていたりしない。私にとってはそれが、興味の無い人間や物だっただけ。

考えようと思えば何でも考えられた。一から十まで完璧に、とてもあっさりと理解して考えられた。

「~~~~~」

私の興味を惹くものは何も無かった。両親が私を気味悪く見ていたのも知ってるけれど、まったくもってどうでも良かった。興味が無いから。

考えたものをパソコンに打ち込むのだって、ただ考えを外に出すだけで楽しくない。だって私の頭の中に既にあるものなんだから。でも、最近はそのが凄く楽しくなっている。

「~~~~~」

これをちーちゃんに見せても、きっと分からないんだろうなあ。
それでもいいんだけどね。

分からないなら分かるように私が説明してあげる。それだけの事
なんだよ。

ちーちゃん、私が初めて興味を持った女の子。ちーちゃんの傍は
とっても落ち着いて、心地よくて、離れる事なんて考えられない。
なのにちーちゃんってば人気者さんだから、他のに連れて行かれ
て東さんはいつもジェラシー。

でもすぐに戻って来てくれるちーちゃん。そのちーちゃんの愛に
東さんは常に溺死寸前だよ。

「~~~~~」でーきた！」

ちーちゃんはこれを見て、なんて言うのかな。東さん的には愛
してるって言うてほしいな。言ってくれないかな。

「待っててね、ちーちゃん」

らぶりい東さんは、今日もちーちゃんまっしぐらー。

時が少し経ち、千冬と東は小学生となった。
一学年三クラスと、少子化の昨今にしては大きい方といえるかもし
れない。

「見て見てちーちゃん！」

いつものように、束は席に座っていた千冬の前にパソコンを差し出した。そこにはまた、千冬には分からない数式や図形が表示されている。

「いろんな物を量子変換！どこでもいつでもなんでも取り出し可能！これで必要らずだね！！」

「へえ。それは便利だな」

「でしょでしょ？ってなわけでさっそく作ってみるんだよ！」

「駄目だ」

うきうきわくわくとする束を、千冬は首を振って止めにかかった。

「えー、なんでなんでなんでー？」

「束の考える物は凄いいからな。誰かに見つかったら、きっと煩くなる」

「ちーちゃんは煩くなるのが嫌いだねー」

「……でも、そんなに作りたいなら、作ればいい」

「うっん、作らないよ。ちーちゃんが嫌ならやらない」

おおよそ、小学生になったばかりとは思えない会話をする二人は、クラスでも浮いていた。幼稚園の頃から何も変わらない光景だ。

ちなみに、束がなぜ千冬と同じクラスにいるのかと言えば、簡単な話で同じ小学校だったからである。偶然にも二人の住所から見ると通う小学校は同じで、クラスについても束が何かする前から同じクラスに振り分けられていた。

そして、偶然はさらに続き席は二人とも隣同士だ。千冬の席が廊下側の一番後ろで、束は二列目の一番後ろ。さとして始まる苗字が随分と多いクラスだったようだ。

「はい。おはようございまーす」
「おはようございまーす」

千冬と束が、いつものように話しているうちに、彼女らの担任となる教師が教卓の前に立っていた。

そうして、二人の小学校生活の幕が開いた。

学校からの帰り道、束は千冬に言った。

「ちーちゃん、うち来ない？」

「束の家？」

「そうそう。ちーちゃんに見せたいものがあるんだよー」

見せたいもの、と言われて千冬は僅かに首を傾げる。思いつくようなものは無かった。

一瞬、今日の今後の予定を考えてみる。家に帰るだけだったから、頷いた。

「えっへへ、ちーちゃんがうちに来るのは初めてだね！」

「ああ……そういえば、そうだな」

幼稚園の頃から、休みの日は束が千冬の家を訪れたので、千冬は束の家に行ったことが無かった。束も、こんな風に誘ったことが無かった。

にこにこ満面の笑みで千冬の手を握って、束は家へと帰る。こんな風に笑顔で家に帰ったのはおそらく初めての事だった。

「さあ、ちーちゃん。どんどん入るといいよ」

「お邪魔します」

奥へ奥へと進める束を前に、千冬は常識を捨ててはいなかった。儀礼的に玄関で挨拶をしてから、靴を脱いで中へと上がる。

束の家は神社のすぐ傍にあった。千冬は前に一度、束の家が神社で、他にも剣道の道場を開いていると聞いていたが、神社と道場とはまた別の場所に、家があるらしい。

一戸建ての家はどこにでもありそうな、普通の家だ。小さな庭もある。それは千冬の家と大差なかった。

「こっちだよー」

「……？」

束は千冬を庭へと連れて行った。靴を脱いでいたので、置かれたままのサンダルを拝借する。

庭に下りた先で、束はトントンと地面を二度、つま先で蹴っていた。そうするとどういう仕組みか、土に丸い円が描かれ、それを二つに分ける様に縦に切り込みが入り、半円になった土がウィーンと左右に開かれていった。

ぽつかりと、庭に出現したのは人間の子ども一人が通れるサイズの縦穴で、その内側は鉄板で覆われ梯子が設置されていた。

「さあさあ、入って入って」

「束、これは？」

「見てからのお楽しみだよ！すつごいんだから！」

千冬は、束に促されるままに梯子を使って穴を下りていく。穴は五メートルほどの深さで、下りた先には広い部屋があった。

「じゃじゃーん！！なんとなんと、束さんは秘密基地を作っちゃい

ましたー！！」

「秘密基地？」

「入れるのは、束さんとちーちゃんだけだよ！それ以外の人が入ろうとしたら、電気がバシンッとなる仕組みだから。ま、それ以前に入口を開けられないんだけどね」

「……………いつ作っただ？」

「三日くらい前かな。束さんにかかればお茶の子さいさい、朝飯どころか卵を割るより簡単にできちゃうのだよ」

「そうなのか…………」

千冬は、きよろきよろと辺りを見回したり、壁となっている鉄板に手をはわしたりと、しばし部屋の中を観察して回っていた。その表情は少しばかり驚きが滲んでいて、それは束を大いに喜ばせる。

「ちーちゃん、楽しい？面白い？」

「……………まあ、少しはな。束の考える物が凄いののは分かっていたが……実際にこういうのを見ると、驚くな」

「ふふつ、束さんが考えるのはこんなものじゃ無いよー。こんなの、ただの部屋でしかないからね」

上機嫌に束は笑うと、鞆を適当に放り投げてパンツと手を打ち鳴らした。すると、何カ所かの部屋の床がくるりと回転し、裏返った床からテーブルやベッドといった家具が現れる。

さしずめ、からくり屋敷というかのような光景を目の当たりにして、千冬は僅かに目を瞠った。

「どう？どう？本当は量子変換で作ろうかなって思っただけけど、それはまた今度ね」

といっても、千冬に止められているうちは作らずに終わりそうだ

が。

束は千冬の手を引いて、現れたベッドにダイブする。鉄板の壁に覆われていはいるが、そこは一つの部屋だった。

「ここはね、束さんとちーちゃんだけの、秘密基地なんだよ」

「そのようだな」

「誰も見てないし、気づかないんだよ。ここにいるのは、私とちーちゃんだけ」

「…………束？」

妖しげな気配に、千冬は自分の首に腕を回したまま寝転ぶ束の方に顔を向けた。

刹那、唇に押し付けられた感触にパチパチと瞬きを繰り返して、次には唇を割って入ってくるぬるりとしたそれに目を見開いた。

「ん、ふっ…………」

「んっ、ちーちゃん…………」

気づけば千冬の体にのしかかる様に、束の体が上にあつて。押し付けられた感触が束の唇だと、割って入ってくるのがその舌だと、そう千冬が気づいたのはその息が絶え絶えになったころだった。

「っん、ぷぁ…………はっ、ふ…………」

ようやく離された唇に、千冬は新鮮な酸素を貪るように肩を上下させて呼吸を繰り返す。

その千冬の様子を、束は彼女の上にのしかかったままで見下ろしていた。じっと、見つめている。

「ふ、は…………束…？」

「ちーちゃん……」

見つめてくる束を、千冬はどうしたんだと首を傾げて見上げた。
その頬は微かに赤く染まっている。

「……嫌がらないの？」

「何を……今のを、か？」

「そう。キス……嫌じゃ、無いの？」

「……どう、なんだろうな」

嫌悪を感じたかといえば、感じず。それ以前に、今の行為に何かを感じたのかといえば、何も感じず。

ただ、幼いながらに千冬も今の束の行為の意味するところは分かるわけで、彼女が真に求める答えが何かも分かっていた。

「……私には、分からないよ。束」

その結果として、千冬の出せる答えはそれだった。

告げられた答えに束は一切の感情を見せず、千冬を見つめる視線を逸らさない。そのままの体勢で口を開いた。

「束さんは、ちーちゃんが好きだよ」

「みたいだな」

「束さんが興味を持ったのは、ちーちゃんだけだよ」

「興味……私以外には、興味が無いのか？」

「無いね」

束はあっさりと、千冬以外の他を切り捨てる。それが当然のように、事実彼女にとってはそれが当然で。

その答えを受けて、千冬は考える様に視線を辺りに彷徨わせて、

そうして束を見た。

「なんで私に興味を持ったんだ？」

「さあ、なんでだろう。何となく……運命？」

「運命か……そういうのも、あるんだな」

気づけばただ、狂おしいほどに求めていた束にとって、なぜ千冬に興味を持ったのかは、ある意味では興味を惹かれたがそれほど重要では無く。

重要となるのは、今日の前に千冬がいる事で。そして千冬が、こうして会話しながら、自分を一切否定してこない事だった。

「……ちーちゃんは、不思議だね」

「……束は、なんでもお見通しなのでは無かったか？」

「そうだよ。そうなのに、ちーちゃんは不思議なんだよ。束さんは、ちーちゃんが分からなくて不思議なんだよ」

「……それは、そうだろうな」

「……？」

千冬は、何も難しいことなど無いように呟いて、言った。

「私は私の事をお前にそれほど、話していないだろ？」

「……そう、だね」

「知らないのなら、分からなくて当然なんだ。そんなに不思議に思う事でもないだろう？」

「……じゃあ、教えてよ。ちーちゃんの事」

「いいぞ」

別に隠すことは何も無いのだと、千冬は軽く頷いた。

さっそく話そう口を開いて、けれどそれからふ、と口を閉じて、

束に聞く。

「何から聞きたいんだ？」

「なんでもいいよ。ちーちゃんの事、たくさん知りたい」

「……と、言われてもな」

いざ話そうとすると、何から話せばいいのかわからなくなってしまい、千冬は少々困惑気味に眉尻を下げた。

「じゃあ、束さんが質問してもいい？」

「ん、ああ。良いぞ」

その方が助かると、千冬は束の提案に賛成して、束の質問を待った。束の質問は早かった。

「ちーちゃんの好きなものは？」

「静かなところだな。自分の部屋は、静かだし一人になれて好きだ」

「嫌いなものは？」

「煩いことは嫌いだな」

「一人が好きなの？」

「ああ」

「束さんと一緒にいるのは？」

「束の傍は落ち着くから好きだぞ？」

それは、前にも言ったたろ、と。千冬の答えに、束はそれまでの表情を破顔させた。

無の表情から一転、いつものように笑った束に、千冬は何となく落ち着く気分を味わいながら、そのまま投げかけられた質問に答えに行った。

「家では何をしてるの？」

「部屋にいるな。寝ていることが多いか」

「なんで？」

「なんで、と言われてもな……………それが、落ち着くからだ」

「ちーちゃんの親は？」

「親？」

東の口から飛び出したのは、彼女からは予想もつかない言葉で、千冬は思わず鸚鵡返しにそれを聞き返していた。

「東さんの親は東さんを嫌がってるけど、ちーちゃんの親は？」

「……………そうだな」

それまですらすらと答えられていた千冬の口が、止まった。

「……………」

「ちーちゃん？」

戸惑ったように東が千冬に声をかける。ハツとしたように千冬が目を瞬かせて、それから笑みを浮かべて答えた。

「親にとって、私はいらぬ子どもらしいぞ」

何度も聞いているから、間違いないと。そんな確信を持って千冬は答えた。

浮かんだ笑みはとても綺麗に作られて、それがあまりにも綺麗だったから、東は無性に腹立たしかった。

「ちーちゃん、また無理してる」

「ああ、そうだな」

「否定しないね」

「嘘じゃないからな」

千冬は、素直だった。束が見破ると、それを浮かべたままで肯定してみせるくらいに。

「笑っちゃやだ」

「なんだ、前は笑えと言ったのに」

「無理して笑ってほしくないよ」

「マンガみたいな事を言う」

さながら主人公のようだと、千冬はそう言って笑みを消した。笑みが消えれば浮かぶのは無で、鋭い目つきがさらに鋭くなったように思える。

けれど束はむしろその表情に満足して、いつかのように入れ替わりで笑みを浮かべた。

「ちーちゃんが無理するのは、束さん嫌だよ」

「そうか」

「だから、ここでは無理、しなくていいからね」

「……束と私だけだからか？」

「そうだよ。束さんとちーちゃんだけの、秘密基地。誰にも見られない秘密の場所だよ」

「……言っておくが、お前と一緒にいて無理をしたつもりは無いぞ」

「知ってるよ。束さんにはなんでもお見通し！」

当たり前のように束が言った。

束は千冬のすぐ横に体を寝転がせて、まるで抱き枕のように千冬の体を抱きしめて、耳に唇を寄せて囁くように言う。

「束さんは、ちーちゃんに会えてうれしいよ」

「……そうか」

「束さんは、ちーちゃんが大好きだよ」

「………知ってる」

ギュウツと抱きしめられて、押し付けられた少しだけ柔らかな胸に、千冬は目を閉じた。

閉じられた目から一筋、涙が伝うのを束は黙って見ているだけだった。

束の秘密基地（後書き）

小学生、彼女たちは小学生、だからまだいろいろと早い……と思うていたのに、気づけばどうして束が暴走。どうしてこうなった。つまりこれはこの小説における二人の方向をすでに示しているという事。つまりはそういうことです。

彼女たちの日常

学校では授業を受けながら束の相手をし、放課後は束の家に招かれ彼女の部屋か、秘密基地で過ごす。

千冬の日常は、入学してから一週間でそんな風に固まっていた。もつとも、その間に早くもクラスメイトに懐かれたり、担任から真面目で生徒たちの中心人物という評価を貰ったりしていたが。

「今日は何する？何するちーちゃん！」

「束のしたいことで良いが……ああ、そうだ」

その日もまた、千冬は束の家に向かっていた。束が後ろ向きで歩きながら千冬に尋ねて、千冬は言ってから少し考え、ふと思いついた事を言う。

「束の家の……篠ノ之神社、だったか？見てみたい」

「神社？ん、いいよいいよ。それじゃいこっか！」

「ああ」

それじゃあ近道、と束はくりりと方向転換をすると、脇道に入っていく。束の家と神社は近いけれど別の場所にあつて、この道の方が早く着けるのを束は知っていた。

既に近くまで来ていたのもあつて、方向転換から十分ほど歩くと、たくさん木に囲まれた大きな神社が見えてきた。ただし、通ってきた道は神社の裏側に通じていたらしく、まず目に入ったのは建物の後ろ側だったが。

正面へと回り込んで、千冬はまじまじと神社を見上げる。参拝客

の姿も無く、風に揺れる木々の葉の音が静かに響いた。

「これが篠ノ之神社だよ」

「結構大きいんだな。お参りしていくべきか……」

「ちーちゃんがそんなことする必要無いよ!」

「……神社の娘が何を言う」

「だって興味無いもん」

あっけらかんと言いつ束に、千冬はまあいいかと思い、気まぐれに辺りを見回してみる。広い境内は見通しが良くて、神社の傍に立つまた別の大きな木造の建物に、千冬は首を傾げて指差した。

「あれは?」

「剣道の道場だよ。見る?」

「いいのか?」

「いいんじゃないかな」

それじゃあ、と千冬は東に導かれるままに道場の扉を少しだけ開けて、中を覗いてみる。

中では、千冬と同じくらいかそれ以上の子どもたちが、師範であろう男性の掛け声に合わせて竹刀を振るっていた。

男性と子どもたちの掛け声が、千冬の耳を大きく揺さぶる。それに溜息を吐いて、千冬は扉を閉めた。

「ちーちゃん?」

「……中、凄いな」

「そう? 束さんはこの中を見た事無いからな」

「見てみたらどうだ?」

「いいよ、興味無いもん」

「そうか」

いつもと同じ束の答えに、千冬もいつものように返して。

二人がそろそろ行こうかと歩き出そうとしたところで、道場の扉が大きく開かれた。

「……束、何をしている？」

「何もしてないよ。束さんはちーちゃんとお散歩してただけ」

「君は、束の……友人か？」

「はい。織斑千冬です、束ちゃんと仲良くさせてもらっています」
「……………」

淡々とした挨拶をする千冬に、扉を開けた男性——束の父親、柳韻はどことなく苦虫を潰したような顔をした。

「……………先ほど、中を覗いているようだったが、剣道に興味があるのか」

「いえ。何をしているのかと思ったので、覗かせてもらっただけです。ご迷惑をおかけしました」

軽く頭を下げて、千冬はそれっきり、興味を無くしたように道場に背を向けて歩き出す。束がそれを追いかけてその手を掴み、そのまま歩き出したのを、柳韻はじっと見つめていた。

それから数日が経った頃、千冬と束は秘密基地にいた。

秘密基地は最初に比べて見違えるほどに物が増え、束のいうところラボに変わっていた。

床のあちこちに伸びる配線避けながらベッドに辿り着いた千冬は、そこに腰かけて上機嫌でパソコンを弄る束を眺める。

束の使うパソコンは、ディスプレイもキーボードも全て空中に投影したもので、そのスペックは束曰く世界一だった。

「ね、ちーちゃん。今日は何をつくるつか！」

「束の作りたい物で良いんじゃないか？お前が作るの、どれも凄いし」

「えっへへへ、ちーちゃんに褒められた」

嬉しそうに笑う束は、話ながらもそのキーボードを打つ手を緩めていない。

束は、前々から考えていた発明品を続々と作りだしていた。というのも、今までは全て千冬に止められていたが、お許しが出たのだ。束と千冬しか入れない、この秘密基地で。その中でなら作っても良いだろう、と。

言うておくが、千冬は束が作るのを無理に止めていたわけでは無い。ただ、束が千冬の言葉に素直に頷いたが為に、作られていなかっただけ。

束の発明は、世に出れば一躍注目されるものばかりだ。そうなる
と自然と束の周りに人が群がるのは必須。騒がしくなるのも必須。
それを千冬が好まず、また千冬を第一に考える束がそれを望まなかっただけ。

見つからないと言い切れる保証があるこの空間でなら、騒がれる心配も無いからと。千冬が言い、束が頷いたから、この秘密基地は束の発明ラボと化している。

「何から作ろうかな。ちーちゃんセンサーにしようかなあ」

「……待て、なんだそれは」

「ん？ちーちゃんを探すセンサーだよ！ちなみに超小型GPSはもう開発済みだから、実はいつでもどこでもちーちゃんを発見出来るんだよ！！」

「ちなみに、そのGPSはどこにある？」

「言ったらちーちゃん、取っちゃわない？」

「とらない」

んー、と束は少しばかり悩んで見せたが、すぐにパツと笑ってここ、と首筋を指差した。

言われた千冬はそこに指を這わせ、すると確かに薄っぺらい何か
が肌に張り付いているのを見つける。

「いつの間に……」

「ちーちゃんに抱き着いた時だよ。肌の色と同化するからまず見つけるのは不可能！」

「……………」

千冬は無言で、這わせていた指に力を籠めると、パキリと押しつぶした。

「ああっ!？」

「とりはしないが、壊す」

「ガガン……そんな、ちーちゃんへのプレゼントが……」

「プレゼントならもっと平和的なものにしろ。こんなの付けなくたって、私はお前の傍にいるだろうが」

「そうだけど、でもでもー……………」

「いいな？」

「……………はい」

睨みと共に凄まれて、束はしょんぼりと頷く。どうやらGPSは千冬の好みでは無かったらしい——そもそも、いつでもどこでも相手に分かる状態で、喜ぶ子どもの方が少ないだろう。

「ん、それじゃ、今日は量子変換装置にしよう!」

「ああ、この前言っていたやつか」

「そうだよ。いつでもどこでも必要らず」

歌うように束は言って、タタツとキーボードを打ち鳴らす。それと並行して、束の座る椅子から伸びた機械の手が何かを組み立て始めて、千冬はそれを眺めていた。

千冬は束のように天才的な頭脳は無く、未だに彼女の作る物の仕組みは一切分からない。分かるのは、束が噛み砕きに噛み砕いて単純にした説明で聞いたことのみだ。

「ふんふふん」

「……楽しそうだな」

「ん、楽しいよ。ちーちゃんがいるからね」

こうしてまた、一つの発明が生まれて、彼女たちの一日は終わりに近づいていく。これが彼女たちの日常だった。

そろそろ帰る時間だと、千冬が秘密基地から出た時。普段ならばまだ道場にいる柳韻が、道着姿のまま縁側から千冬と、続いて出てきた束を見下ろしていた。

「剣道を、やってみないか」

「……はい?」

唐突なその提案に、千冬は彼女にしては珍しくぱかんとした顔で、何とも間の抜けた返事を返す。

柳韻は縁側から庭に下り立ち——何も履かずに裸足で——千冬に

竹刀を差し出した。

千冬は差し出された竹刀を間近に見つめ、首を傾げて不思議そうに柳韻を見上げて聞く。

「なぜ、私に？」

「……あまり、言うべき事では無いのかもしれないが、君は私の娘と同じように思えたからだ」

「束と、同じ？私ですか？」

「ちーちゃんと束さんが同じだと、なんか文句でもあるの？」

不機嫌を露わに千冬の隣に並んだ束が、柳韻を睨み付けた。柳韻が何とも言えない複雑な顔をして、二、三度首を横に振る。

「そうでは無い。だが、お前にも言っただろう。もつと物事に興味を持てと」

「別に何にも興味が無い訳じゃないよ。すぐに飽きちゃうだけ」

「それがいけないと言っているんだ。何にも興味を持たず、それを受け入れずにいるなど、決して——」

「どうでもいいよ」

束が、ギョツと千冬に抱き着いた。

「ちーちゃんがいるもん。他はどうでもいい」

「束……」

「興味を持ってないものにどうやって興味を持てって言うの？完璧に理解できるものにそれ以上どう理解を示せて言うの？面白くないものを面白くないと思う事の何がいけないの？」

「……だからといって、全てを拒絶するのはいけない」

「別に拒絶なんてしてないよ。ただ興味が無いから気にしないだけ」

「……」

取りつく島も無いとは、このことだろう。柳韻は娘の答えに頷
れた。

束の中には既に束なりの考えが根付いており、それが間違っ
ていて分かっていても柳韻には正すことが出来ずにいる。正すことが
出来ないから、柳韻は束に触れる事が出来ないままだった。

「……剣道のお話、お受けします」
「ちーちゃん……？」

重苦しいともいえる沈黙の中、千冬はそれまでの会話などまるで
無かったかのように、答えを紡いだ。それに驚いたのは束だった。

「束と私が似ているかどうかは、お話しするつもりはありませんが
……剣道については、お教えいただけるなら、教わりたいと思って
います」

「……そうか」
「なんで？なんで、ちーちゃん？」

淡々と、紡がれる言葉に柳韻は頷き、束は疑問を投げかける。千
冬はそんな束を見て、なんてこと無いように答えを告げた。

「教えてくれると言うのなら、教わるだけだ。他意は無い」
「そうなの？やってみたかったんじゃないの？」
「さあ……少なくとも、誘われなければやらなかったと思うぞ」
「そっかあ……じゃあじゃあ、束さんが誘ったら、ちーちゃん束さ
んに付き合ってくれる？」
「私の出来る事ならな」

あっさりと言ったのける千冬に、束は約束だよ！と笑みを浮かべ

た。それに頷き返した千冬に、柳韻はやはり、と内心で苦い思いを抱いていた。

「（この子は、束と似ている……）」

誘われなければ、やらなかった。けれど誘われたから、やる。

束は誘われてもやろうとしないが、千冬は誘われればやるという。そこは決定的な違いがあったけれど。

やると言いながら、そこに一切の千冬の感情が無い。彼女は束同様に、他の事に興味を抱いていないのが分かった。

「（どうして、こうも）」

笑顔で千冬に話しかける束と、それに無表情ながら答える千冬を見つめて、柳韻は竹刀を握る手に力を籠めた。

彼女たちの日常（後書き）

束にいつウサミミをつけさせるか、それが問題です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0576z/>

千冬と束は似た者同士

2011年12月7日11時49分発行